

# 近世蝦夷地の地名

9月9日(金) 18:00~19:30 東京会場

9月14日(水) 18:00~19:30 札幌会場

講師 高木 崇世芝 アイヌ語地名研究会会員

ただいまご紹介頂きました高木です。このようにたくさんおいで頂きましてありがとうございます。

私のきょうのテーマは、「近世蝦夷地の地名」というものです。現在、アイヌ語地名を研究されている方々は大勢おりますし、優れた論文や著書を出されている方も幾人もおられます。しかし、アイヌ語地名と和人の命名による「和地名」も含めた北海道全般の地名の研究は、まだ不十分ではないでしょうか。私は、アイヌ語地名・和地名を含めた近世における蝦夷地の地名の特徴というものを、問題提起のようなかたちで話してみたいと思っております。拙い話になりますが、聴いて頂ければ幸いです。

それでは、皆さんのお手元にプリントがあると思いますが、それに従ってお話いたします。

近世の蝦夷地は松前藩によって支配され、その支配する範囲は、遠く千島列島からカラフト島に及びました。蝦夷地の地名は、もともとアイヌ語地名であったはずですが、松前藩の所在地である松前市街を中心としたいわゆる「和内地」から徐々に「和地名」が拡大してゆくこととなります。地名の変遷というのは複雑ですが、資料に基づき極めて狭い範囲で、その一端を述べてみたいと思います。

## 1 初期の地図・記録に見える地名

### (1) 国絵図の中の地名

江戸幕府は、270年間の施政の中で4度にわたって国ごとの大型地図を作成しました。それを「国絵図」といい、その国絵図を元にして作成された日本全図を「日本総図」といいます。

国絵図作成の1度目は慶長9年(1604)ですが、このときは、松前藩に作成命令が出なかったようです。2度目は、正保元年(1644)に実施され、その時、松前藩が作成し提出した「松前島図」が、正保日本総図の中に入っています。この中に見える蝦夷地周辺図こそ、現在、知られる最古の蝦夷図であり、もっとも古い地名が確認できるのです。この図の蝦夷地周辺に見える地名数は、次の通りです。

蝦夷地 82、千島列島 33、カラフト島 17 計 132

これらの地名を現在の地名と比較検討すると蝦夷地の地名は、ほとんど現在の地名にあてはめることが出来、きわめて正確であることが判明します。それに比べて千島列島の地名は7割以上は、後年の地名と同じですが、それ以外は不詳だそうです。また、カラフト島にいたっては5、6の地名より解明できないようで、中には黒竜江附近の地名も混在しているようです。

しかし、このことで当時の松前藩の各地における調査の正確さの度合いを知ることができるわけです。3度目は元禄10年(1697)から開始され、松前藩は同13年に「松前島図」を作成し提出しました。この図の原本は現存しませんが、模写図が残っております。その地名数は次の通りです。

蝦夷地 230、千島列島 34、カラフト島 23 計 287

正保国絵図から約50年後の元禄国絵図では蝦夷地の地名が2.8倍に増加していることが分かります。

4度目の作成は幕末の天保6年(1835)から開始されましたが、これは、ずっと後ですのでここではふれません。



元禄国絵図「松前島図」

### (2) 『津軽一統志』に見える地名

寛文9年(1669)から3年間余にわたったシャクシャインの戦いは、幕府や松前藩に大きな衝撃を与えましたが、この時、秘かに蝦夷地を探索したのが津軽藩であり、そのときの調査記録が『津軽一統志』巻十に掲載されました。その中に、蝦夷地の地名一覧があり、217の地名が載っています。これは、国絵図の地名とは異なり、松前藩以外の者によって調べられた地名として貴重なものです。国絵図地名との比較によって、その相違も確認できます。地名の一部をのせます。

松前より上蝦夷地迄所付

松前 けわい坂 弁才天 赤平 おりと  
ねふた とつてう さつまい つま内  
あかかみ 雨たれ石 のしの下 きよべ

(3) 『諸国案内旅雀』の地名

『諸国案内旅雀』は、貞享4年(1687)に京都で出版されたもので、今でいう全国旅行案内書です。その中に、蝦夷地の地名が3頁にわたって77載っています。僅かな地名数ですが、当時、上方や江戸の人々にも遠い蝦夷地の地名が、一部であるにせよ広く知られるようになったことを意味する大切なものだと思います。

その一部をあげておきます。

松前よりのつとろへノ道

松前 をよへ 大沢 白神 れひけ  
くぬい金山 せつない うす しこつ  
とかち きいたつふ しれとこ つころ  
合四百八十里



『諸国案内旅雀』

(4) 初期蝦夷図に見える想像の島々

1650年代から1750年代にかけての約100年間に次々と蝦夷図が作成されるようになりました。それらは、いずれも民間での無名の人たちによる作図ですが、この時期の蝦夷図を一括して「初期蝦夷図」とよびます。その特徴は、地形は様々ですが、蝦夷地の地名はほぼ正確であること、図中の島々には、想像上の島が描かれることがあることです。その想像上の島名には次のようなものがあります。

女島、女房島、ラセツ島、大黒島  
小人島、はだか島、白かね島、磁石島  
ヲキノイヌ島

皆さんは、架空の地名は地名研究でない、と思われるかもしれませんが、しかし、架空の地名であっても、その伝播の変遷が重要だとおもいます。例えば、白かね島は銀の島です。この島も磁石島も、そして女島も、ヨーロッパの古い地図にも描かれる島なのです。その地図が、日本にも伝わり世界図・日本図の中にも描かれるようになり、ついで北上して古い蝦夷図にも現れるようになった事実が大切だと思います。女島やラセツ島も日本図の南方の海に描写される島です。ラセツ島というのは、漢字で書くと「羅刹島」となります。この島(または国)は、日本図の中では、「此国女ハかりすむ国也、男行ぬれハ二度不帰」というふうにかかれ、美女(実の姿は男を食い殺す鬼女)の住む島で、

男が行けば二度と帰ることが出来ない、というのです。この島がなぜ、蝦夷図にまで描かれるようになるのか、このことが興味あることです。

想像の島々を描写したものとして、有名な井原西鶴の『一目玉鉾』も紹介しましょう。この本は元禄2年(1689)、大坂で出版された絵入りの全国名所案内記というべきものです。さきほど、『諸国案内旅雀』を紹介しましたが、それは地名のみの本でした。今度は、絵地図入りで文章も載っています。蝦夷地周辺は次のようなものです。

- 日の出の浜
- 夷千島 此島長さ百三十里、横十五里
- 蠟孤島 夷より此所へ海上百里有といへり
- 常盤島 是は夷より五十里
- 氷浮橋 島浜みなみな獵師の住家
- 離小島 海辺に白善光寺とて一堂有
- 松前 上の国餌指といへる大所有、浦々の末々は昆布にて葺し軒端の人家も見えわたりぬ

2 松前島郷帳の地名

国絵図作成の際には、「郷帳」とよばれる石高と村名を記した土地台帳も作成されるのが慣例でした。松前藩の場合は、正保郷帳、元禄郷帳、天保郷帳の3回作成されたことが記録に残っていますが、正保郷帳は現存しません。元禄郷帳は江戸の学者、太田南畝の随筆『一話一言』に掲載されていますし、天保郷帳は国立公文書館「内閣文庫」に原本が所蔵されています。いま私たちが知ることが出来る、松前藩の元禄郷帳、天保郷帳は、当時の公式の地名集であり、重要な資料であることはいままでもありません。ただし、東北以南の郷帳には石高の記載がありますが、松前藩の場合は米の収穫がありませんから、地名のみで石高の記載はありません。

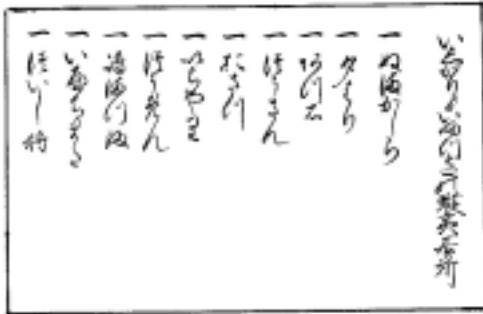
(1) 松前島郷帳(元禄郷帳) 元禄13年(1700)

地名数は、蝦夷地206、千島列島34、カラフト島21、計261が記載されていますが、地域ごとの地名数は次の通りです。

- 従松前西在郷(和人地) 47
- 従是(西)蝦夷地 41
- 是よりそうやの内 3
- 離島之分 4
- 従松前東在郷(和人地) 37
- 従是(東)蝦夷地 61
- くるみせ島の方 34
- いしかりよりいふつまで 13
- からと島 21

この郷帳からは、蝦夷地の全体の区分、和人地の範囲、離島の数、内陸部の地名などが判明します。しかし、先にあげた元禄国絵図の地名数とは一致しません。これは元禄

国絵図には、「岬名」が8つ掲載されていますが、元禄郷帳には「岬名」は載りません。しかし、その岬名を差し引いてもなお一致しないのです。これはなぜなのか、私には分かりません。



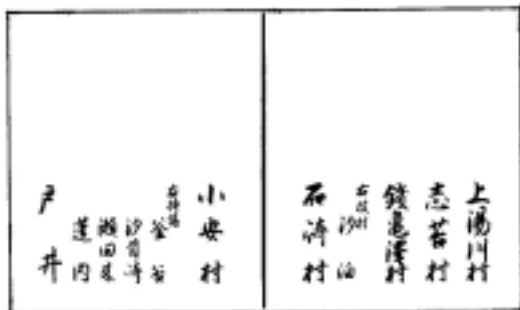
元禄『松前島郷帳』享保2年本

(2) 松前島郷帳(天保郷帳) 天保5年(1834)

地名数は、蝦夷地 479、クナシリ・エトロフ島 19、カラフト島 49、計 547 を数えます。地域ごとの地名数は次の通りです。

○従松前東在(和人地)	84
○東蝦夷地場所	128
○従松前西在(和人地)	44
○西蝦夷地	195
○東地嶋々之分	20
クナシリ嶋	8
エトロフ嶋	11
○西地嶋々之分	8
カラフト嶋	49

元禄郷帳から134年後の郷帳ですので、大幅な地名増加が分かります。また、表記は和人地では、本村と「枝村」、村並と「持場」、アイヌ地では「持場之内」とあります。このように表記することは元禄郷帳には見られなかった新しいことですので、これによって、当時の松前藩の村政の仕組みの一端を知ることができます。



天保『松前島郷帳』(原本)

3 地名改正と新地名の誕生

蝦夷地はもともとアイヌ語地名のみであったはずですが、渡島半島の南端部へ和人の移住や定住が開始されると、

徐々にではありますが、アイヌ語地名が和地名に改名されたり、新しく和地名が生まれるのは、当然の成り行きであったに違いありません。改名や新地名についての古い記録をいくつか紹介します。

(1) 地名の改正

江戸初期の蝦夷地における地名の改正については、ほとんど記録が残っておりません。古い地図などに見える地名から、いくつか例をあげてみます。

正保以前か

シコツ→亀田(現函館市)

正保から元禄ころ

ウスケシ→箱館(現函館市)

元禄国絵図「松前島図」による

ひいし村→石崎村(現函館市)

大内村→吉岡村(現福島町)

折か内村→ねまつり村(現松前町)

(2) 新地名の誕生

江戸初期に新しい地名が成立していく過程も詳しい記録はありません。ここでは、元禄郷帳のうち、享保2年本(写本は北海道大学附属図書館蔵)に記載される新地名を紹介します。その時期は、元禄13年(1700)から享保2年(1717)の間であることは間違いないでしょう。いずれも和人地内であること、和地名であること、が注目されます。

つくし内村	西和人地
とまるへ村	〃
すゝき村	〃
にこり川村(現大野町)	東和人地
ふみつけ村( 〃 )	〃
下市ノ渡村( 〃 )	〃
七重村(現七飯町)	〃
上湯の川村(現函館市)	〃

(3) アイヌ地に見える和地名

当時の和人地以外、すなわちアイヌ地における和地名は、どのようなものがあるか調べてみました。多くは見当たりませんでした。次のようなものがあります。

百人浜(現えりも町) 地名に関する伝承が残っています。

アブラコ澗(現えりも町) アブラコとは松前地方の方言で、「アイナメ」という魚名によるものです。

シコツ→千歳(現千歳市) 文化2年(1805)、箱館奉行の羽太正養が、この辺りを往来した折りに、命名したという記録が残っています。

4 アイヌ語地名の解釈書

江戸時代も幕末に近くなると、大勢の人々が蝦夷地を頻

繁に往来するようになり、それに伴って実に多くの地誌・紀行・地図類が著作され、なかには出版されるものもありました。

その一つに、アイヌ語に関わる著作も出現しました。まず、アイヌ語辞典です。寛政4年(1792)の奥書をもつ1冊本『もしほ草』(後に2冊本『蝦夷方言藻汐草』と改題し、文化元年序がある)は、上原熊次郎というアイヌ語通詞が著したものです。初めて出版されたアイヌ語辞典として有名なもので、収録単語数は2千をこえます。ほかに、嘉永7年(1854)出版の『蝦夷語箋』というアイヌ語辞典もあります。

そして、「アイヌ語地名」に関する本の登場となりました。

(1) 『東蝦夷地名考』 秦檎丸著 文化5年(1808)

秦檎丸は、幕府雇として蝦夷地の調査に携わった人物です。測量術に長じ、絵画も得意としましたので、『蝦夷鳴奇観』というアイヌ風俗画集や詳細な『蝦夷地図』などの著作があります。『東蝦夷地名考』は、東蝦夷地ヤムクシナイからノツシヤブ崎までの沿岸地名140を考証したものです。トとツの中間の発音をド・ヅで表記しています。140の地名のうち、語源の解明ができなかったものは「未考」として保留しているのは優れた態度だとも思います。

自筆本は現在まで4冊が知られているのですが、私はこの4冊を詳しく調べて、作成されたのは、函館市中央図書館本、東京大学総合図書館本、国立公文書館「内閣文庫」本、北海道大学附属図書館本の順番であることを確認できました。「北大本」から、いくつか例をあげます(全文でなく一部の記述にとどめます)。

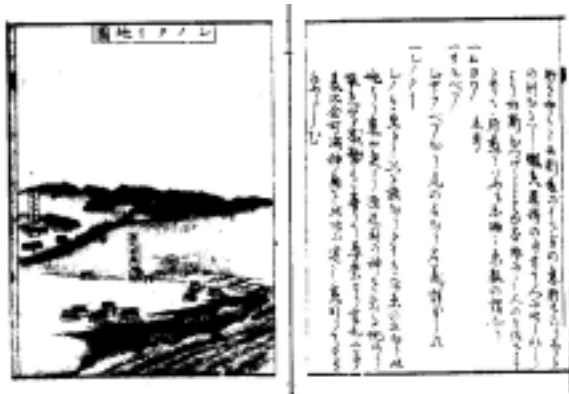
「ヤムクシナイ～ヤムは病の意、クシは越なり、ナイは溪なり」

「ヲシヤマンベ～古名ウアシヤマンベと云、ウアシは雪の名、シヤマンベは比目魚なり」

「フレナイ～フレは赤き事を云、紅の転音、此辺、海岸山溪すへて赤きゆへに名とす。」

「ヲタノシケ～ヲタは砂の称、ノシケは中と云語なり、シラスカ・クスリの途中なる故に名付たり」

「アツケシ～アツは集の義、ケシは是なり、又下の義なり、此処東夷地村里の極なる故に此名あり」



『東蝦夷地名考』内閣本

(2) 『蝦夷地名考并里程記』 上原熊次郎著

文政7年(1824)

先にあげた『もしほ草』というアイヌ語辞典を著した上原熊次郎の著作です。

本書は、東蝦夷地から西蝦夷地に至る全沿岸の和人地・アイヌ地の地名257を考証したものです。トとツの中間の発音をヅで表記しています。自筆本は東京国立博物館本の1冊が知られ、翻刻もされています。

これも、いくつかの例をあげてみます。

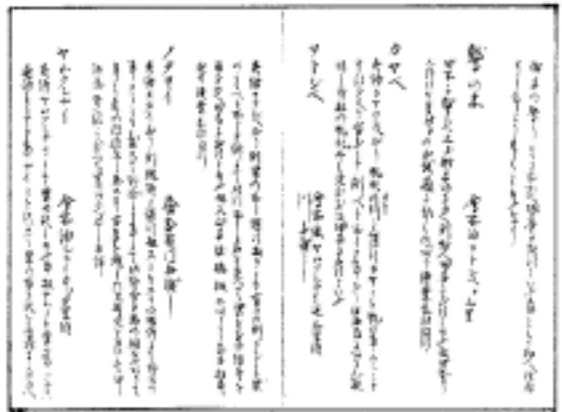
「茂辺地～夷語ムーベツなり、塞る川と訳す、ムーとは塞と申事、ベツは川なり」

「箱館～夷語ウシヨクケシなり、ウシヨクケシの略語にて、則、湾の端と訳す」

「トマノイ～夷語トマヲマイの略語なり、則、延胡索の在所と訳す、扱、トマとは延胡索の事、ヲマイは有ると申事」

「ヨイチ～夷語イヨチなり、ユウヲチの略語にて、則、温泉の有る所と訳す、扱、ユウとは温泉の事、ヲチとは有る所と申」

「志根子～夷語シ子シゴなり、シ子エムコの略語にて、則、一ツの水上ミと訳す」



『蝦夷地名考并里程記』東博本

(3) 『蝦夷地名解』 編者不詳

本書は、『蝦夷地名考并里程記』を元にした地名解であるといわれています。多くの写本が残っているのは、簡便で写し易かったからかも知れません。これも例をあげます。

「喜古内～夷語リコナイなり、リコとハ高く上ると申事、ナイとは沢と申事にて高く上る沢と訳す」

「モリ～夷人ヲニウシといふ、ヲは前の如く在ると申事、ニとハ樹木の総称なり、ウシとは生じる又ハ群る扱と申事にて樹木の繁りたる処と訳す」

「シラリカ～夷語シラリイカの略言なり、シラリとは汐の事、イカとは越し候と申事、此川満汐には汐入る形に号く」

(4) 『蝦夷地名奈留辺志』 松浦武四郎著

安政6年(1859)出版

蝦夷地やカラフト島の探検家として有名な松浦武四郎の著作です。松浦は、『蝦夷日誌』をはじめ、数多くの著作や出版でも知られております。ここにあげるものは、折帳形式の簡単なものですが、箱館から東西蝦夷地を経て松前に至る78の地名について記しています。やはり例をあげてみましょう。

「ピロウ〜ヒロハの訛り、岬の蔭の訳」

「クスリ〜クシルの訛り、クシハ越る義、ルは路と云訳、是よりニシベツの方え道有故」

「ソウヤ〜岩礫有る処、ヤは岡と云義」

「ヲタルナイ〜ヲタは砂、ルは路、ナイハ沢」

「ビクニ〜ビクウニの語り、小石ある処」

「松前〜ヲマツナイの転し、ヲとハ有る、マツとハ女、ナイは沢にして、女居る沢と云」

## 5 アイヌ語地名の特色

北海道には、いまなお数多くのアイヌ語地名が残っています。このアイヌ語地名の特色はどんなものなのか以下に述べてみます。

### (1) アイヌ語地名は何から命名されたか

アイヌ語地名の発生は、いつ頃まで遡れるのか分かりませんが、何を元にして命名されたものかは分かっています。その大まかな分類例をあげますと、およそ次のようになります。

- 地形から〜川・山・沼地・海岸など
- 動物名から〜熊・鹿・犬・鯨など
- 植物名から〜トリカブト・ウバユリ・イタドリ・黒百合・栗など
- その他

### (2) 山名と川名の特色

近世の記録に現れる山名は、813座のうち現在までに68%が消失したという研究(渡辺隆氏調査)があります。

川名は、大別して「ナイ」と「ベツ」があるのですが、山田秀三氏によれば、「ナイ」は、カラフト島から北海道北部にかけて多く、「ベツ」は、千島から北海道の太平洋岸(えりも岬付近まで)が多いといえます。また、その中間地帯もあるそうです。

### (3) 多いアイヌ語地名

羽田野正隆氏の調査によるアイヌ語地名の出現頻度を紹介します。羽田野氏は、松浦武四郎著『東西蝦夷山川地理取調図』、『陸地測量部仮製5万分の1図』、永田方正著『北海道蝦夷語地名解』の資料を用いて、北海道のアイヌ語地名頻度を調べて論文として公表しました。この中から出現延べ数の多い順に11をあげてみます。

( )内の数字は頻度数です。語源は私が他の資料から記

入したものです。

- 1 ポロナイ (136) ~大きい川
- 2 オンネナイ (121) ~親川、大きい川
- 3 ルベシベ (88) ~道に沿って下る川
- 4 チャラセナイ (72) ~音を立てて流れる川
- 5 チャシコツ (68) ~砦の跡
- 6 ペテウコピ (45) ~川の合流点
- ポンナイ (45) ~小さい川
- ラウネナイ (45) ~深い川
- 9 タブコブ (37) ~孤立した山
- ヌツパオマナイ (37) ~野原の端の川
- フレベツ (37) ~赤い川

### (4) アイヌ語地名の先駆者・研究者

先ほどあげましたアイヌ語地名に関する著作者である秦億丸、上原熊次郎は、江戸時代のアイヌ語地名の先駆者であることは、いうまでもありません。ここでは、明治時代以降に活躍した先駆者と研究者をあげてみます。

#### 豊島三右衛門

豊島三右衛門は、幕末に請負場所の支配人や通詞を勤めた人物です。晩年に釧路周辺の地理調査を行い、アイヌ語地名を調べた著作があります。その地名表記は全て漢字なのですが、驚くほどの難解で奇怪な漢字を用いております。なぜ、これほどの難しい表記をしなければならなかったのか、本人に聞いて見たいものです。その時期は明治15年から18年にかけてのことでした。豊島の地名解は、清野謙次コレクション(4冊)、北海道立文書館(2冊)、国学院短期大学「金田一記念文庫」(1冊)が知られていますし、関係する論文も発表されております。

#### 白野夏雲

白野夏雲は、甲斐国(現山梨県)の出身ですが、明治になって、開拓使や北海道庁に勤めました。晩年は北海道神宮宮司にもなりました。

明治19年から20年にかけて、道庁よりアイヌ語地名調査を命じられ、『蝦夷地名録』(全3冊)を著しました。その稿本は、北海学園大学「北駕文庫」に所蔵されています。この稿本の詳細な研究はこれからだとも思います。

#### 永田方正

永田方正は、江戸に生まれ、明治14年、渡道して開拓使や北海道庁に勤務して学校教育に携わりました。明治24年、『北海道蝦夷語地名解』をはじめ出版し、昭和2年の5版まで版を重ねました。この著作は、後のアイヌ語地名研究に大きな影響を与え、いまなお、欠くことのできない重要な文献となっております。

#### 知里真志保

知里真志保は、幌別村(現登別市)出身の北海道大学教授でアイヌ語研究者として著名なことは、私があらためていうまでもありません。

多くの著作や論文があり、とくに『分類アイヌ語辞典』全3冊(昭和28～37年出版)や『アイヌ語入門』(昭和31年出版)、そして、『地名アイヌ語小辞典』(昭和31年出版)などが知られ、現在も多くの研究者に活用されています。

### 山田秀三

山田秀三は、東京都出身のアイヌ語地名研究者です。アイヌ語の地名研究に画期的な手法を取り入れ、その後の研究に大きな道を開きました。アイヌ語地名に関わる多くの著作・論文がありますが、『アイヌ語地名の研究』(全4冊)(昭和57年～58年出版)に集大成されています。

## 6 地名の漢字表記と仮名表記の試み

アイヌ語地名の表記は、江戸時代を通して、片仮名、平仮名、漢字と様々でありましたが、幕末になると、アイヌ語地名の表記に関する試みが何度か行われました。以下にその一端を述べてみます。

### (1) 『東北夷輿地志』 岳太仲著

岳太仲は、いかなる人物であるか分かっておりません。寛政11年(1799)に著作された『東北夷輿地志』を見ると、序文に「片仮名、平仮名の地名は、文字を間違ひやすい。日本の地名も元はアイヌ語地名と同じことなので、漢字で表すのが風雅である。」と記し、中国古典を参考として蝦夷地の地名を漢字表記しています。岳太仲のいう「風雅な地名」の一例をあげてみましょう。

房陵(ホロヘツ)、新桑(ウラカワ)、毘陵(ヒロウ)、敦丘(アツケシ)、雄狐洲(ヲコシリ)、太陵(フトロ)、歴平(フルヒラ)、章房(シヤツボロ)、顛崖(イシカリ)、崇陽(ソウヤ)

なんと難しい読みでしょうか。しかし、これが岳太仲には「風雅」であったのでしょうか。

### (2) 幕府重臣たちの通達

文化3年(1806)から翌年にかけて蝦夷地近海に大きな事件が発生しました。ロシア船によるカラフト島、エトロフ島、リイシリ島などでの発砲襲撃事件です。同4年、蝦夷地へ渡った幕府の重臣たちは、次のような通達を出しました。

「蝦夷地之地名、是迄各さまざまに文字を候得共、不宜候間、仮名又は片仮名に而認可申旨、備前守殿被仰渡候段、撰津守殿被仰聞候。右之通、八月二日筑前守殿御達被成候。」

\*注 備前守～牧野正精(老中) 撰津守～堀田正敦(若年寄) 筑前守～戸川安論(箱館奉行)

この記録は、同じ幕府の役人であった向山誠斎の文書の中に見えるものなのですが、なぜこのような通達が出され

たのか、理由がよく分かりません。内容は、「蝦夷地の地名は、これまで平仮名・片仮名・漢字など様々な文字を使ってきたのはよろしくない、これからは、平仮名か片仮名のみ認める」といっているのですが、その後の文書は見当たらず、これが徹底されたような記録もありません。

### (3) 前田夏蔭等の調査と研究

嘉永7年(1854)、国学者の前田夏蔭が幕府より蝦夷地記録の調査を命じられました。前田は、さっそく配下の人選を行い、安政3年(1856)から同5年までの3年間、目賀田帯刀、市川十郎等を蝦夷地・カラフト島へ派遣して、実地調査をさせました。この時、前田によって、蝦夷地の地名は漢字表記が望ましい旨が述べられています。したがって、蝦夷地を調査した一行の者たちも、その趣旨にもとづいて、著作の多くを漢字表記としています。

- 『蝦夷地名真字相定候ニ付奉伺候書付』前田夏蔭著  
\* 東部・西部・北部に区分して106の地名を漢字表記で示す。
- 『野作東部日記』 榊原銈蔵・市川十郎著  
\* 地名は漢字表記。
- 『蝦夷実地検考録』市川十郎著  
\* 地名は漢字表記。
- 『延叙歴検真図』(全12冊) 目賀田帯刀著  
\* 地名は漢字・片仮名表記。

蝦夷地の地名を前田、榊原、市川が、どのように漢字表記しているのか例をあげてみます。

アブタ～虻田、阿武多、安富多  
レブンゲ～礼文芸、連分解、礼文計  
モロラン～茂呂瀾、諸瀾、室蘭  
ホロボツ～母呂別、保侶別、縋別  
ユウブツ～勇払、湯淵、雄武都  
ニイカップ～新加部、新葛布、新勝府  
シズナイ～静内、志都内、鎮内  
シャマニ～舎麻迹、射魔兒、師山耳  
ホロイズミ～保呂泉、保老泉、縋泉  
サルル～去留、左累々、佐留流

3名が、それぞれ苦心して漢字を当てはめていることが分かります。もちろん中には、3名とも同じ漢字表記をしている地名もあります。

## 7 北海道の誕生と地名

明治を迎えて、蝦夷地は「北海道」と改称され、新しく「国・郡」も成立しました。開拓使を中心とする新しい行政の開始です。国郡のもとであらたな町村制度も整いつつありました。最後に、明治初期の新しい地名制度についても少しふれてみます。

### (1) 道名と国郡名の選定

明治2年(1869)8月、開拓判官、松浦武四郎の原案が採用され、ここに「北海道」が誕生し、同時に11国、86郡も決定しました。

この時の松浦の原案は、『北海道々国郡名撰定上書』というものです。その概略を紹介します。

○道名案～日高見道、北加伊道、海北道、海島道、東北道、千島道の6案

○国名案～渡島国、後志国、胆振国、日高国、石狩国、天塩(出塩・出穂)国、十勝(刀勝・利乳・尖乳)国、釧路(久摺・越路)国、根諸国、北見国、千島国の11国

\*後、これに「樺太国」が追加されて12国となりました。

○郡名案～省略

新しい86郡もすべて漢字表記となり、以後、北海道の市町村名や字名は、統廃合を繰り返しながら、漢字表記が中心となっていくことになるわけです。

拙い話を最後までお聴きいただきましてありがとうございました。